

岸田首相は「因縁の場」でどう迎えられるのか



西田進一郎

岸田文雄首相が4月11日、米連邦議会の上下両院合同会議で演説する。米大統領の一般教書演説など特別な機会に開かれる場だ。日本の首相では、2015年に当時の安倍晋三首相が初めて演説して以来となる。

かつては日本の首相が合同会議で演説するには高いハードルがあった。ルーズベルト大統領（当時）が1941年12月の真珠湾攻撃の直後、「屈辱の日」演説を行った場であったからだ。演説を受け、議会は直ちに日本に対する正式な宣戦布告を決議した。その日本の首相が同じ場で演説することに、議会内では抵抗感が強かったとされる。

日本の首相が一人も合同会議で演説することがなかった間に、韓国は6人、同じ第二次世界大戦の敗戦国でもドイツは5人、イタリアは6人の要人がそれぞれ演説していた。それを戦後70年の節目に突破したのが安倍氏だった。

今回は両院の親日派や東アジア情勢に詳しい超党派の議員らが2月に働きかけを始め、ジョンソン下

院議長ら議会指導部が3月4日に招待を発表した。

スムーズに進んだ背景には、環境の変化がある。安倍氏が前例を作り、米議会内では世代交代が進んだ。一方、米国の力が相対的に低下する中、軍事、経済両面で存在感を高める中国が権威主義的な姿勢を強めている。民主主義や法の支配などの価値観に基づく国際秩序を維持するために、日本が果たす役割への期待が豪州や韓国、インドなどと並んで高まっているという状況もある。

15年当時は、大戦で旧日本軍の捕虜となった米軍人の遺族らの団体や韓国系団体などが議会に反対や慎重な対応を求める場面もあった。そうした動きも今回は表面化しなかった。

ただし、油断はできない。アルバニー州豪首相は23年10月に国賓訪米した際、演説する予定だった。しかし、招待状を出した当時のマッカーシー議長が解任され、後任の議長は訪米前に決まらなかつた。このため演説が中止になる不運に見舞われた。

バイデン大統領の一般教書演説を議場で聞きながら、演説で「希望の同盟」を語った安倍氏が超党派の議員から拍手を浴び、握手攻めに遭う姿を思い出した。岸田氏はどのように迎えられるのだろうか。